大東文化大学経済論集　104－2，2015.09

新メガ第二部門の完結　課題と可能性

〔経済理論学会第62回大会における「第２回若手セミナー」
（2014年10月24日、阪南大学あべのハルカスキャンパス）での報告〕

竹　永　　進

第一次（旧）メガと第二次（新）メガ

第二次メガというのは新メガとも呼ばれますが、これは当然その前があるからです。その旧メガについて最初に少し触れておきたいと思います。それは1920年代末から30年代中頃まで旧ソ連で一時実施された企画ですが、途中で挫折しました。それとのつながりからお話をしていきたいと思います。

旧メガは三つの部門からなっていました。これに対して新メガは四つの部門からなっています。違いは四番目の部門が付け加えられたということであり、最初の三つの部門のコンセプトは基本的に同じです。また全体的なコンセプトも同じなのですが、これに第四番目の部門が加わったというのが新旧両メガの一番大きな違いです。第四部門は、マルクスそしてエンゲルスが生涯にわたって書き残した抜粋ノートや切り抜きそれに読んだ本の欄外への記入を残らず収録することになっていました。しかし本日の私の報告ではこの部門についての詳細は省略させていただきます。

旧メガは1920年代の末から刊行が始まりましたが、それは旧ソビエト内部で非常に大きな変化があった時期にあたります。メガに関係していた人々が追放されたり逮捕されたりそして最後は処刑されたりというようなことがありました。また、旧メガの刊行が続いていた数年のあいだにもいろいろな変化がありました。それはともかくとして、最終的に、旧メガにおいては当初に計画されていた三部門全四十二巻のうち、『資本論』関係（第二部門）をのぞくマルクスとエンゲルスの全著作を収録する第一部門の最初の七巻が刊行され、第三部門の四巻が刊行されました。書簡を収録する第三部門は四巻で完結することになっていました。これは全三十五巻を予定している新メガの同じ第三部門（書簡）よりもはるかに少なかったということであり、それだけ旧メガの当時に発見されていたり収録が

予定されていたりした書簡が少なかったということになります。こうして合計十一巻が刊行されたところで、36年から37年のスターリンによる第二次大量粛清の時代にメガも中止ということになりました。これにはいろいろな理由がありました。戦争が近づいているからとか、あるいは財政的な問題があるとか、また、非常に大きかったのはメガのコンセプトそのものに対する当時のソビエトの指導部の一種の反感と言うようなものでした。特にそれは、第一部門の最初の七巻が出版されたのですが、またこの点は第二次メガについても同じですが、原則として最初の第一巻から順番にやっていくということでしたので(結果から見るとかなり順不同で後の方の巻が先に出るという例もありましたが)、全体のプロセスを見ると始めから作業を進めるという方針で行われました。こうして実際に刊行されたのは最初の七つの巻でした。これらはすべて1840年代のいわゆる初期マルクスといわれる時代の著作物でした。これらの中に『ドイツ・イデオロギー』や『経済学・哲学手稿』といった、この時代になって初めておおやけにされたものがふくまれていました。こういったものが当時の「西側」でソ連との距離をおいていたマルクス研究者その他の思想家たちに非常に大きなインパクトを与えました。それがまたソ連の当局には大変に気に入らなかったということも、旧メガ中止の大きな理由だったと思われます。もちろんこのようなことは、メガの編集にあたっていた当事者たちが意図したことではなかったのでしょうが。

もうひとつ、第一次メガが終わった時までの重要なことは、第二部門がまったく実現されていなかったということです。つまり『資本論』関係のものが一巻も出ていませんでした。しかし出ていなかったということは準備作業が全然なされていなかったということではなく、作業は進められていました。しかも、第一部門と同じように執筆・刊行順序にしたがって始めからやっていくということでしたので、今われわれが知っている『グルンドリッセ』つまり『資本論』関係の最初の草稿から作業がすすめられていたと思われます。これがいわばメガの後産のような形で、メガの巻としてではないのですが1939年と1941年にモスクワで二巻に分けて出版されました。その編集は注釈や異文の収録まで含めて明らかに第一次メガのそれを踏襲したものでした。ただしこの時は戦争中でもありましたし、またソ連においてドイツ語で出版されたということで、国際的な反響はほとんどありませんでした。その後、その内容はまったく同じままでひとつの巻に統合されたものが第二次大戦後

の 1953 年に当時の東ベルリンから刊行されました。これによってはじめて『グルンドリッセ』が国際的に知られるようになりました。実質的に旧メガの第二部門（『資本論』関係）の成果がこういう形ではじめて出ました。

だからかどうか分かりませんが、それに対して、第二次メガ、70 年代初頭から刊行準備が始まった新メガにおいては第二部門が最初に完結しました（2012 年）。第一次メガの反省なのかそれへの反動なのか、またはそのようなことと関係なくたまたまそうなったのかよく分かりませんが、このような対照的な状況があります。

新メガ第二部門の構成　I

第二部門の内部構成がどのようになっているかは、この報告の最後に掲げた二つの一覧表に示されています。第一巻から第十五巻までありますが、まずこれを一から一十五まで順番に並べて第二部門がどのようなコンセプトに基づいて構成されているかということと、そのようなコンセプトに基づいた第二部門が今ではすべて刊行されているわけですがそれらが実際にどのような形で刊行されたかということが分かるように、ふたつ違った形で並べてみました。こうしていろいろなことが見えてくると思います。

まず、最初の一覧表（「新メガ第二部門の構成」）を見てみます。タイトルに「新旧編集体制において変化なし」と書き添えておきましたが、後からお話しするようにこれも大変重要なところです。90 年代の始めにソ連や東欧の社会主義体制が崩壊してメガも一時中断の危機に瀕しました。しかしなんとかそこを乗り越えてまったく新しい編集体制が発足しました。ここには一種の断絶のようなものがあります。編集方針もここで大きく変わりました。またそれだけではなく、残った巻をどのように刊行していくか、あるいはどれを刊行してどれを取りやめるのかということが議論されました。新メガはこのとき全体として相当な縮小を余儀なくされました。他の諸部門とりわけ第四部門においてはこの縮小はかなり大幅なものになりましたが、しかし、第二部門だけは新体制への移行においてプランの変更はありませんでした。

一から十五までの全体を見ると、大きな切れ目がいくつかあります。まず一から四まで、次に五から十まで、それから十一、十二、十三、そして十四、十五となります。メガはどの部門でも原則は年代順の配列つまり執筆・刊行されたその順番の通りにテキストを配列

していくというのが原則ですけども、若干そうではない、そのようにすると編集上の困難が生じるケースについては別の配列措置が取られています。

第二部門においても同様で、最初の一から四までは1857年から1868年までの11-2年間のうちに、マルクスが『資本論』の第一部・第二部・第三部というかたちできちんと整理する前に書いた草稿（ただし刊行物を含む巻もあります）が執筆順に配列・収録されています。

第一巻（二分冊）は『グルンドリッセ』と呼ばれる1857-8年の草稿です。第二巻は1859年に出版された『経済学批判』です。『グルンドリッセ』を書いてから『批判』を出版するまでのあいだマルクスは、この著作の完成原稿をすぐに書いたのではなく何度か書き直しをしています。これが現在「経済学批判の原初稿」と呼ばれるものですが、第二巻にはこれらも収録されています。これがII/2です。

そして、第三巻は六分冊からなり、61-3年草稿と呼ばれる23冊のノートにマルクスが書き連ねた「経済学批判の第二草稿」と呼ばれるものを含みます。このうち半分以上のスペースを占める部分がいわゆる『剰余価値学説史』です。これらの草稿がマルクス没後にカウツキーによって1905年から10年のあいだに刊行されました。彼の編集の方法についてはこれまでさまざまな問題点が指摘されていますが、ともかく彼がこの草稿をはじめておおやけにしたということの大きな意義は否定できません。また、新メガに先立って刊行され完結したMEW（マルクス・エンゲルス著作集、日本語では今は絶版となっていますが『マルクス＝エンゲルス全集』（大月書店刊）というタイトルで全訳されています）にも収められていましたので、内容そのものはすでに広く知られていました。これに対して、61–3年草稿のなかではじめて公表された部分が入っているのが、II/3.1とII/3.6です。この二つの分冊には「新しい」と言いますか初めて一般の読者・研究者がみることのできる草稿が含まれています。

それから次に四ですが、この巻には61–3年草稿を書いてから後、まさにクロノロジカルに、これから後68年までのあいだにマルクスが書いた草稿類がこの場合にも原則として執筆年代順に並べられています。

ここまでは、『資本論』第一部、第二部、第三部という区切りよりも、どういう順番で書いたかということが中心になって構成されているわけですが、これ以降の諸巻つまり五

から十五まででは、最初にまず第一部についての五から十までが来ます。この部分の内部は年代順になっています。ところが十一から十三というのは第二部関係でこの中でまた年代順になっているのですが、しかし年代順から行くとたとえば十一には六とか七とかと同じ時期かまたはもっと前に書かれたものも含まれています。これらには第二部に関連した草稿と刊行物を含めるということで三つの巻が構成されています。それから、十四と十五が第三部の関係です。十四、十五は二つしかないのですが、これは第三部に関連する原稿が非常に少なかったということによります。そういうふうに全体が組み立てられています。

新メガ第二部門の構成　Ⅱ

次に、実際にこれらの巻がどのようにして出たかということについて述べたいと思います。最後に掲げた一覧表のうち「新メガ第二部門の各巻・分冊の刊行順序」と題した後のほうをご覧ください。ここでは各巻を刊行の順番にならべてみました。ここでどういうことが分かるかということですが、ここでもまずいくつかの区切りを入れて考えてみたいと思います。最初のところからすこし後に II/5 というのがあります。ここまでが最初のまとまりになります。次に、II/4.2 までが二番目のまとまりを形作ります。ここまでとそれ以降は非常に重要な区切りをなしています。そして、それからあとが最後のひとまとまりとなり、全体として三つの部分を構成します。

最初の部分ですが、新メガの刊行準備と実際の刊行が始まったのは 1970 年代前半のことでした。この一覧表に記載されているのは第二部門の諸巻だけですので、これらの巻の刊行年次のあいだに他の諸部門のいくつかの巻の刊行年次がはさまっているわけですが、それらはここには書かれていません。したがってこれだけが刊行されたものではなくまたこれだけで新メガの刊行状況の全体があらわされるわけではありません。第二部門だけについて考えてると、1976 年に最初の II/1.1 からまさにクロノロジカルに始まっています。そして 83 年までつまり II/5 まで、この約 7 年間に全 10 冊からなる四巻が刊行されているわけで、最初のうちは非常に滑り出しが良かった、順調に刊行が進んでいったと言えます。それは編集体制がしっかりして仕事がスムーズに行ったということと、もうひとつは、第二部門のこの最初の部分の中には、はじめて刊行されるものがあまりなかったということが大きな理由と思われます。つまりはじめて刊行されるものは要するにマルクスの

書いたあるいはエンゲルスが編集した手書きの原稿を元にしてそれを活字にしていくという大変な作業をやらなければならないわけですが、しかしそうではなくてはじめから活字になっていたものが多かったことによると思われます。

大変な作業をはじめからやらなければならなかったのは、1976 に出た II/3.1 とそれから 82 年に出た II/3.6 です。つまり 61–3 年草稿のはじめと終わりの初めて公表される部分です。これ以外はなんらかの形でそれまでに公表されていました。もっともそのほとんどはマルクスとエンゲルスの死後に出版されていますが。ですからもちろんそのまま新メガに収録するというわけにはいかず、すべてオリジナルとの照合を前提とするわけですが、しかしともかくできたものがすでにあったことにより刊行準備の作業は軽減されたと想像されます。一覧表にはそれぞれの巻あるいはその分冊のあとに、出版された年とそれからカッコをつけて年号を入れてありますが、これは新メガの巻として出る以前にすでに出版されていたものがあった場合それらがいつ出版されたかを併せて示すために付加しました。

まず一番はじめに出た II/1.1 については、先ほど申しましたが、1939 年と 1941 年にモスクワで出て 53 年にベルリンで出ています。これは II/1.2 も同じです。それから II/2、3、4 そして 5、これらにはここではカッコ内に文言を入れていませんけども 1905 年から 1910 年のあいだにカウツキーによって最初に刊行されました。これはかなりカウツキー独自の考え方・解釈によって編集の手が加えられています。それと、それにプラスして、そのまま新メガに入れるというわけにはいかないのでしょうが、MEW にもすでに収録されていました。この版はメガと同じく党直属の編集機関において編集されたゆえに参考にしうる度合いははるかに高かったと思われます。メガの原則はマルクスやエンゲルスの書いた通りに、彼らのオリジナル草稿のノートのページ番号の通りに原稿を配列するということですが、実はここにもいろいろな問題があり、例えばページ番号が書いた順番通りに付されていない可能性があるところがいくつもあるようです。そういう話を細かくやっていると時間がなくなりますので、そういう問題があるということだけ触れておきます。

それから II/2 ですが、これは『経済学批判』を主要な内容としています。この書の本文の部分はもちろんマルクス自身が最初に出版した体系的著作であり、まさに記念すべきものです。この著作についても最初にマルクスが出版した刊本に加えて、メガの 1980 年

に出版された刊本の基本的な土台になったものが存在しました。それは、旧メガのやり方に近い形で編集されていますが旧メガとは異なった企画としてすでに1929年にリャザノフとルービンによって出版されたものです。この刊本が新メガにも生かされているということが、ロシアセンター(RGASPI)のヴァーシナさんという方の最近の論文（「イ・イ・ルービンと草稿「マルクス貨幣論概説」竹永　進訳、『東京経大学会誌――経済学――』No.277、2013年」）の中で明確に示されています。1929年に刊行されたのは『経済学批判』が1859年に出版されてから70周年を記念するという趣旨でした。リャザノフたちはすでに20年代のはじめからマルクス・エンゲルス研究所でメガの下準備、つまり、ヨーロッパの各所に散在していたマルクスとエンゲルスの草稿をあちらこちらから集めてきてそれらを解読する、さらに草稿のなかに引用されているオリジナルテキストの現物（大部分が19世紀ないしは18世紀の刊行物）、これらからなる基礎資料を収集するという作業を、早くから進めていました。そして、この29年に出た『経済学批判』のリャザノフとルービンによる版はそういった作業の成果を生かして作成されており、第二次メガの第二部門第二巻も基本的にはこの刊本によっているということが、ヴァーシナさんによって主張されています。私は自分で検証したわけではありませんが、彼女の考証には説得性があるように思っています。

それから、この最初の部分の最後に来るII/5、これは『資本論』第一部の初版、1867年に出たものです。これを元にしてそのままの形で新しいメガの巻として出したものです。もちろんそれに注釈やその他の研究のための付属資料が含まれていますが。したがって、この部分に入る諸巻のなかではII/3.1とII/3.6だけが草稿の解読から始まる大変な作業をはじめからしなければならなかった巻ということになります。それで、6年から7年のうちに比較的順調に進んだわけです。

そこから次に、II/6からII/4.2というところまでについて見てみましょう。II/5からII/6まで4年間の空白がはいったのはどうしてなのか分かりませんが、そのあと92年まで継続的に出ています。この時代はちょうど、ある年代以上の方々には記憶があると思いますが、ソ連や東ヨーロッパの経済が非常に困難な状況にあった、商店に消費物資がなくパンひとつ手に入れるためにも人々が毎日4−5時間も行列を作らなければならない、いわゆる行列経済と言われ社会主義経済のパフォーマンスが極度に悪化した時代にあたりま

す。新メガの刊行の停滞にはこのような事情も関係しているのではないかと思われます。

80年代後半のこの時代にII/6からII/4.2までが刊行されています。このなかでもやはり、はじめから編集作業をやらなければならなかったものは、II/4.1とII/4.2のふたつだけでした。しかし前者の主要な内容をなす『資本論』第二部の第一草稿は実は新メガ版として刊行される前にロシア語で出版されていました。この点については後でまた立ち返ります。それ以外は、II/6、7、8、9、10だけで、これら五つの巻は『資本論』第一部の初版から後のいくつかの版です。第二版、第三版、第四版、そしてフランス語版、英語版です。第二版は1872年に初版と同じ版元のマイスナーから出ました。第三版は1883年にやはり同じところから出ました。そして1894年の第四版も同様です。これらはすべて、前の版の残部が払底してきたので新しい版を用意したいというマイスナーの要請に応えて出されたものです。第三版まではマルクスのところに話が来ていましたが、マルクス没後の第四版についてはエンゲルスが受け持ちました。それから、翻訳は英語とフランス語ですが、フランス語版については日本でもずっと昔ですがいろいろ話題になりました。フランス語版の翻訳者は一応ロワということになっていますが、パリコミューンの少し後の1872年から75年の間に分冊形式で出版されました。このフランス語版にはマルクスの手が非常に多く加わっています。いろいろな箇所に書き直し・追加・削除が加えられています。かつて平田清明氏などはフランス語版はドイツ語版とは独立した独自の意義をもつもので、これに依拠するべきだという主張さえしました。「個体的所有の再建」その他彼のマルクスの経済理論に対する理解を裏付ける論拠をこの版に求めるというようなことがあり、一時いろいろな形で話題になったりしました。そして、日本語にもすでにメガとは別に翻訳されています。また、1887年にムアの訳によってロンドンで出された英語版の準備と刊行は、マルクス没後のことでしたので直接に関与したのはエンゲルスでした。これらの版が最初に出版されたままの形で新メガの諸巻として刊行されています。新メガの編集方針にしたがって新しい巻を出すにはそれなりの作業が必要なのでしょうけども、草稿の解読から開始しなければならないのに比べれば作業の分量は比較的少なかったのではないかと想像されます。それに対してII/4.1とII/4.2は非常に大変だったのでしょう。前者が出ると後者もそれに続いてすぐに出す予定であったと思われますが、実際には大きく遅れて後者は扉には1992年刊と書いてありますが、実は1993年に出ました。92年というとすでに

ソ連共産党の解散・ソ連邦解体の少し後になりますが、この巻は実質的にはこれらの出来事が起きる前の旧体制のもとで編集されて作られ、そして、ディーツ出版社という旧東独の社会主義統一党との関係が深かったマルクス主義関係の著作を多く出版していた古い出版社から出ました。そしてこの巻が新メガ第二部門のうちこの出版社から出た最後になりました。

そして、80年代末から90年代のはじめにかけて旧社会主義の崩壊という大きな出来事が起き、党も解散しました。新メガを編集していたのが旧ソ連と旧東ドイツのそれぞれの党の中央委員会に直属していたマルクス＝レーニン主義研究所というところでしたから、党が解散すれば当然これらの研究所も解体ということになるわけで、したがって研究所が主体となって進めていた新メガという企画も当然そこでストップということになりました。そのまま行けば新メガはそこで終わりになってしまうという状況に一時陥ったのですが、そして、研究所自体はその後復活しませんでしたけれども、しかしメガの続行を担う新体制が発足しました。この経緯は第二部門だけにかかわる事柄ではありませんのでここではこれだけにとどめておきます。

90年代の初頭に新体制が発足してから後に最初に成果が現れるまでほぼ10年間を要しました。それがII/14です。ただしこの約10年の空白というのは新メガ第二部門についてのことですが、他の諸部門についても特に1990年代末までの数年間は同様に空白の状態が続いていました。この間に編集方針の大幅な見直しが行われましたが、ここではその具体的な内容に立ち入ることは控えます。ただ、この空白の時代にその後のメガの編集と刊行にも大きな影響を与えた出来事のうち、IT化の急激な進展と普及にだけは言及しておく必要があります。ウィンドウズ95がマイクロソフトから発表されると同時にパソコンとインターネットが爆発的に普及した、そういう時代でした。1993年と2003年の間にそういう状況によって本の作り方も大きく変わってきました。これ以降に出た本は最初からデジタル的な手法によって作られています。つまりすべてのテキストがはじめからデジタルテキストの形で作られてそれを印刷するということになってきました。それ以前のものはそうではなかったわけで、紙の上にかかれた手書きの原稿をもとに活字を組んで印刷されていました。新メガが旧体制から新体制に移行する中間の空白期に、同時にそのような大きな変化が生じたのです。

次に、最後の部分が出た2003年から12年のことに話を移しましょう。本日の若手セミナーの企画が設けられたひとつの理由は2012年つまり一昨年に第二部の第四巻の3（II/4.3）が出版されて、これによって第二部門が予定通り、予定というのは当初の予定ですね、1970年代のはじめから立てられていた計画が変わらなかったということは先に述べましたけれども、その計画どおりに全体が完了したということ、このことは新メガ全体が完了したということではまだないのですが、ともかくひとつの段落として大きな出来事であったと思います。その間、2003年から12年までの9年ないし10年の時間があるわけですが、この間に出たものについてお話しをして行きたいと思います。

まず、出版されたのは六巻ないし六冊ほどでした。分冊の形式になっている巻とそうでない巻がありますが、ひとつひとつ分けて話をしているとややこしくなりますのでここではとりあえずすべて巻という形で扱うことにします。独立して刊行物として出たものはすべて巻として数えるとすると六巻が出たことになります。このうち、すでに新メガとして出る前に印刷物として刊行されていたものは二つしかありません。これは第二部と第三部、それぞれエンゲルスが編集して1885年と1894年に刊行しました。この二つの巻については、ともかくその刊行されたものを忠実にもう一度新メガの巻として復元するということですので、これでもそう簡単ではないかもしれませんけど、しかしそうでないものに比べれば比較的容易であったと思われます。しかし、先ほど三つの区切り（1983年まで、1993年まで、そして、2003年以降）を設けましたけれども、最初の二つの部分と最後の部分とのあいだの大きな違いは、これらの六巻のうちまったくのはじめから編集作業を開始しなければならなかったものが四つも含まれているということです。つまり三分の二ものかなり大きな部分が最初の最初からやらなければならなかったということです。実はかならずしもこのすべてが最初の最初からということでもないのですが、詳しいことは省略させていただきます。ともかく、これら四巻についてはマルクスの草稿からやっていくということが必要であったわけです。

日本人研究者の新メガ編集への貢献

この中で特記すべきことは、われわれの仲間ということになりますが、これらの大変な作業を要した四つの巻のうち二つの巻に日本人研究者の貢献が非常に大きな意味を持ちま

した。もちろん、最終的には、メガというのはわれわれの日本語とは大きく異なるヨーロッパ言語で書かれたものを出版するということですので、やはりネイティブの協力がなければ日本人だけですべてをやるということはできないわけですけれども、しかしある部分はわれわれ非ネイティブでも担うことはできます。II/11、II/12、それに、エンゲルスが編集し1885年に刊行した『資本論』第二部を復元したII/13、この三つの巻が日本人研究者が主体となって、それにドイツ人研究者あるいはロシアの研究者・編集者たちからの援助を受けて出版までたどり着きました。

十一、十二、十四、そして四の三、この四巻が既刊の刊本に依拠することができない、草稿からの編集を要するものでした。したがって、実質的な編集作業は巻数で表される刊行実績に比して相対的に非常に大きかったし、困難も同様に大きかったと思われます。これが、権力党の中央委員会に直属する研究所で多額の予算を取得して多くの人員の配置の下に遂行されていた旧体制とは異なって、非常に貧弱でBBAW（ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー）以外ではほとんどが無給つまりボランティアでやっている現行の体制下で達成されたということにも大きな意義が認められると思います。日本人の編集参加者たちもボランティアで活動していますが、こういう作業は非常に大きなエネルギーと時間を要します。しかしその割には学術的な評価の対象にはならないものです。もちろん、最後に実際にメガの巻として刊行物が出てそこに名前が載っていればすこしは評価の材料になるかもしれませんが、しかしそれまでには非常に長い時間がかかります。にもかかわらず、そういう貧弱な体制の下でやって一定の成果が具体的にあがったということは非常に意義のあることではないかと思います。

『資本論』第一部の決定版

すこし話が前後しますが、第二部門のうちの五から十までの六巻はすでに新メガの巻が出る前からリプリントでも見ることができていました。フランス語版についても同様です。翻訳もありました。初版も日本語訳されています。そういうことにかけては日本の学界は非常に得意で盛んでしたから、『資本論』のマルクスの生前に刊行されていたそれぞれの刊本についてはリプリントやその翻訳やその編集ダイジェスト版（例えば、価値形態論の各版対照版）によって、新メガの刊行を俟たなくても基礎資料に事欠くことはなかっ

たと言えます。この限りでは新メガの対応する諸巻が出たからといって非常に大きな変化があったわけではないと言っていいと思われます。

ただし、これらの巻が全集の中で揃うことによって新たに問題になったことがあります。それは、第一部は途中まではマルクスが直接関与したわけですが、いったいそのうちのどれを第一部の決定版と考えたらよいのかという問題です。各版対照をしようなどという人はよほどの専門家で、普通の人は『資本論』を読むことさえしない、あるいは、読んだとしてもたぶんどれかの版をひとつだけ読むことでしょう。その場合に重要になるのは、どれを使うのが一番適当なのか、決定版はどれかです。新メガが出るまでは第四版ということでした。MEW も基本的に第四版を基にしています。そういった考え方が作られたのは、1930 年代のリャザノフのあとを受けてアドラツキーが所長をしていた時代に出たインスティテュート版が第四版を底本として採用したことによります。そしてこの措置がいかに正しいかということがインスティテュート版の序文（この序文は古い日本語訳には付いているものがあります）の中で述べられています。このような判断がなされたのは、やはりマルクスとエンゲルスは思想的にも一体であるという考え方に強く基づいていると思います。マルクス亡き後にエンゲルスが行ったことに間違いはない、仮にマルクスが生きていたとしても同じことをしていたにちがいない、それに対して何か疑問を挟むというようなことはとんでもないというような考え方が背後にあって、第四版を決定版として扱うべきであるという考え方がずっと定着していました。別にそういうことまで考えないにしても第四版が便利であることは否定できません。完全ではないにしてもそれ以前の版との相違点をそれ以前の版よりも詳しく、ある程度は注記してあります。初版ではこうだったところがその後この版ではこう変えられたとかいうことが書かれてあります。もっとも実際には、細かく比べてみますと、記入漏れや不正確なところがたくさんありますが。

あらためて、どれがマルクスの刊行した第一部の決定版として、ひとつだけを読むとすればそれはどれか、が問題となります。もちろんひとつずつ読めばそれに越したことはないのですが、一般読者のだれでもが重複部分も多い長い著作のいくつもの版を読み比べてみるというわけにはいきません。ひとつを読むとすればどれにするのが最も妥当かということは、多くの人に『資本論』をよんでもらう際に非常に重要な問題になります。

『資本論』に限らずどんな著作でもそうですが、決定版というのは普通常識的には著者

がかかわって最後に出版したものとされます。ところが『資本論』にかんしてはそこで非常に大きな問題が起こるのです。というのは、著者であるマルクスが実際に関与して1872年に出版された第二版とほぼ同じ時期にフランス語版が出版されていますが、この外国語訳の版のなかに元のドイツ語の二つの版には含まれていなかったさまざまな変更が入っており、これをどう処理するかという問題があるからです。マルクスはその後、実際には実現しなかったアメリカ版、英語に翻訳してアメリカで出版するという話があったときに、その関係者に対して「編集指図書」というのを書いて送っています。これは実はエンゲルスが後年までずっと知らなかったようなのですが、この指図書を最初に日本で公表したのは私の先生であった佐藤金三郎さんなのですが、それを見ますと、全体として言えることは、マルクスが第二版とフランス語版とを統合したものを作りたいと考えていたということのようなのです。そして、第三版が1883年に出ていますが、この年にマルクスは亡くなります。つまり第三版の作業を死の直前まで続けていたのですが最後まで果たせなかったということです。もし、第三版が最後までマルクス自身の手によって実現されていれば、このときつまり亡くなる直前の著者の意向が反映されたことになり、これを決定版として扱うのに何も問題はなかったでしょう。しかし作業途中で亡くなったマルクスのあとをエンゲルスが引き継いだために、マルクスの意向やそれに基づく仕事はこの版のなかに一部しか生かされなかったことになり、あとはエンゲルスの手が入っているわけですから、この版には両者の仕事が混在しているわけです。両者が一体だという考え方をとれば決定版は第三版あるいはさらに第四版だということで済むのですが、この点についても論争がありいまだに未決のままです。新メガですべての版が揃った現在、あらためて未解決の論争問題が表面化してきました。

第二部門の諸巻に含まれる原資料の性格

それから、第一部の各版と同じように第二部門の諸巻のうちII/1とII/2とそしてII/3.2からII/3.5の内容は、それぞれ『経済学批判要綱』、『経済学批判』、『剰余価値学説史』として新メガの刊行以前からすでに知られていました。これらの多くは草稿なのですが新メガの前から一般に利用することが可能になっていました。もちろん、解読の問題だとかあるいは草稿の配列順序だとか、そういうことにおいては問題があったかもしれません

が、大雑把な内容はすでに知られていました。

反対に新メガで初めて公表される新資料というのはマルクスの草稿ないしはエンゲルスの編集原稿のどちらかになるわけです。II/3.1 と II/3.6 において、61-3 年草稿のなかの『剰余価値学説史』に前後する主として『資本論』第一部の内容に関連する部分が初めて公表されました。これが公表されることによってドイツでも日本でもいろいろな論争が起こりました。

第二部門第四巻の内容と特質

次に II/4 ですが、この巻の三つの分冊の内容について紹介していきたいと思います。1861-3 年草稿の執筆にすぐ続けて、クロノロジカルには II/3 の次に来る草稿がこの巻に入っており、このすぐ続く時期から 68 年までに執筆された『資本論』関係の草稿がその内容です。68 年で切ってあるというのは分量的な切り方もあるのでしょうけれども、それよりも大きな意味は 68 年にマルクスが『資本論』の第二部の第二草稿（第二稿）という非常に大きな草稿を書いていて、ここから後は『資本論』関連の草稿はほとんど第二部に関連するものになるわけですが、そこで切ろうということだろうと思います。この時期の草稿が三つに分けて第二部門第四巻の三つの分冊に収録されることになりました。これらが、先ほど申しましたが、1988 年、1993 年、そして最後に一昨年の 2012 年に出版されました。この巻の内容は多くが新メガ以前には公開されていない草稿です。ですから、『資本論』の成立史研究とか草稿研究をやっている人たちから非常に期待され待たれていました。特にその第三分冊（II/4.3）は一昨年までずっと待たされました。

まず内容について簡単にお話しします。II/4.1、これが最初に来るわけですが、このなかには比較的これまで知られていたものが多く含まれています。この分冊の主要な内容は、まず、「第六章　直接的生産過程の諸結果」、これは 1930 年代にすでに公表されていました。日本でも終戦直後から翻訳が出ておりよく知られています。これが「第六章」とされているのは、マルクスが 61-3 年草稿を書いた後に第一部の原稿を最初に書いたわけですが、そのうち後代まで残ったのがこの「第六章」の部分だけだったからです。この部分はこれを執筆した当時マルクスが第一部の締めくくりとしてどういうことを考えていたかということを示すと同時に、第一部の全体に対してどういう見方をしていたかということを示し

ています。われわれが現在読むことのできる『資本論』の刊本（先ほどお話ししたような経過から、実質上エンゲルス編集の第四版であり、MEW にも収録されています）からだけでは見て取れないような内容を含んでいます。けれどもこれは新メガが出るよりもずっと前から、かなり昔から知られていました。それから、第二部の第一稿。これがドイツ語の原文で印刷・公表されたのはこのときが初めだったのですが、実は約 10 年前の 70 年代の末にロシア語の『マルクス＝エンゲルス著作集（第二版）』の補巻という形で出ていました。これは、80 年代の初めに、旧メガの時代（1930 年前後）にモスクワですでに作成されていたドイツ語原文の解読タイプ原稿との照合を行いながら翻訳されています（中峯照悦他訳『『資本論』第 2 部第 1 稿』、大月書店、マルクス・ライブラリ、3、1982 年）。それから、これも 1920 年代からよく知られているものですが、『価値・価格・利潤』。一般には『賃金・価格・利潤』というタイトルで知られていますが、これはマルクス没後に英語の原文で最初に公表された時に付されたオリジナルとは少し異なったタイトルです。これは第一インターナショナルの総評議会で 1865 年にマルクスが行った講演が元になっています。この講演はちょうどマルクスが『資本論』第一部から第三部までの内容についての草稿を集中的に書いていた時期のもので、これらの草稿を非常に短いパンフレットの形で平易に叙述しなおしたものと見ることができます。その意味では極めて重要な文献であると思います。ただし、実際にパンフレットとして活字になったのは講演のずっと後のことで、このときタイトルも上記のように少し変更されました。しかし新メガでは元のマルクスの講演が忠実に再現されましたのでタイトルも元に戻されています。これが II/4.1 の主要な内容ですが、これらはすべてすでになんらかの形で知られていたものです。ですから私などは変な勘ぐりをして、大事なものや関係者の多くがかねてから早く知りたいと思って待っていたような資料は後にお預けにして、まず最初はすでにみんなが知っているようなものを出したのではないかと思っていました。しかし実際にはそういうことではなく、クロノロジカルな順序に従って準備がすすめられた結果であるにすぎません。

次が II/4.2 ですが、これは旧体制の下で準備された第二部門の最後の巻として 1993 年に出ました。この II/4.2 の中にも非常に重要なものが入っています。それが「第三部主要原稿」です。『資本論』の第二部のためにはたくさんの原稿が執筆されましたが、第三部についてはマルクスは一回書いたきりでした。なぜそうなったかと申しますと、最初に、

第一部から第三部までの全体の原稿をざっと書いていって、そして第一部から順番にまとめていこうとしたわけですが、第二部のところで止まってしまいました。こうして第三部まで手が回らなかったので、この部については最初に書いた大きな原稿だけしか本格的な原稿はできませんでした。それから後は第三部については断片的な原稿が多数残されただけとなりました。しかし、最初に書いた原稿を元にしてこの部の全体の仕上げとなるような原稿を書き上げるという作業には、マルクスは結局生涯の最後まで取りかかることはできませんでした。エンゲルスが 1894 年に出版した『資本論』第三部はおよそ 30 年も前に書かれたこの原稿にだけ基本的に依拠しています。第二部のような、いろいろな原稿からつぎはぎをして編集するということにともなって発生するような問題はありませんでした。ただしこの主要原稿は非常に完成度が低く、さらに執筆順序に関しても編集過程でさまざまな推測を施さなければならず、出来上がった第三部は複雑な問題を多く含むことになりました。原稿の内部でも、原稿は第二章（篇）から書き始めたのではないかいうことも言われています。各部の執筆順序も一から三へとではなく、第三部の途中まで書いたところでそこに割り込むようにして第二部の原初（第一）稿を書いた、そしてそれが終わって再び第三部にもどり続きを書いたのではないか、という推測もなされています。もしそういう考証が確定した場合、考証結果にしたがって原稿をクロノロジカルにそのまま配列して印刷すると、第二部と第三部の原稿が複雑に入り組むことになります。しかし、メガでの処理は第二部の原稿を最初に置くということになっています。また、第一部は大部分が失われてしまって最後の「第六章」と題した部分のみが残ったため、これが II/4.1 において第二部の第一原稿の前に置かれていることは先ほど述べた通りです。第一部の第一次原稿が大部分失われて残っていないのは、マルクスがこの原稿を 1867 年に刊行された第一部初版の最終仕上げのためのベースとして利用して、すでに「使用済み」のものとして処分してしまったからではないかと私は推測しています。逆に、刊行された『資本論』第一部にはこの「第六章」の内容に相当する部分は含まれておらず、したがってこの「章」は「未使用」として保存されたのではないでしょうか。同じように、第二部・第三部の草稿が保存されていたのは、これらがまだ後で仕上げ作業のために必要と考えられたからでしょう。この例に限らず、実際に出版された著作について最終段階ないしこれに近い原（草）稿が残っていないことがあるのは（例えばリカードの生前に刊行された諸著作）、こ

うした事情によるのではないでしょうか。

第三部の原稿内部の執筆順序だとか、あるいは、第二部の原稿と第三部の原稿とがどういう関係で書かれたかとか、そういう極度に複雑で解明の難しい問題があります。しかし、メガを編集するということになると、編集者たちはやはり一定の解決といいますか「こうだ」という方針を出さなければ編集の作業ができないわけですから、それで一旦決断をするわけですね。しかし決断をしてやってもやはり実際に活字になって出るとその後でいろいろなことを言われ、問題が起きてきます。第三部についてはご承知のようにエンゲルスの編集原稿と元の原稿との相違などの多くの問題がまだ未解明のままになっています。

次にII/4.3ですが、これが一昨年出たものです。私はこれに以前から非常に期待していたのですが、その実際の内容はやや期待はずれでした。ここには新メガで初めて公表される『資本論』第三部関連の草稿15篇が収録されています。ひとつの分冊の中に15篇があるということは要するに短い断片がいっぱい入っているということです。まとまった原稿はないということです。しかもその15篇はII/4.2収録の草稿を書いてから後にマルクスが書いたと推定されるものです。つまり、68年までの3-4年のあいだに書いたとされる多数の断片がこの中に収められています。詳しく全部見たわけではありませんが、バラバラと見てみた印象では、第三部の最初の部分、「剰余価値の利潤への転化」、「利潤の平均利潤への転化」を論じた、われわれが普通に見ている現行の『資本論』第三部の第一篇から第三篇あたりに当たる問題群を、何度もしつこくいろいろな数字例を使いながら書き換え書き換えしています。全体的な印象はそういうことです。ですから、それから後の地代理論だとか信用理論だとかあるいは利潤率の傾向的低落だとか、そういったことについてのところまでどうも話が及んでいないように思えます。II/4.3にはそういったものが入っています。

以上にII/14の一部を加えると第三部の全草稿がそろいます。II/14の一部にもこのように草稿が入っているのですが、これらは1868年から後のマルクスの生涯の残りの15年のあいだに書かれたものですが、II/4の三分冊収録のものも合わせたこれらの草稿群の大きな特色は、『資本論』の三つの部に関連する諸問題を整序されないままに同時並行的に関連付けながら論じているという点にあります。これは61-3年草稿の特に終わりの方の

部分つまりII/3.6に収録されている部分に対しても同じように当てはまります。あそこは本筋から行けば資本の生産過程についての部分の終わりの方を書くつもりだったのですが、その中に地代だとか再生産の問題だとかいろいろなものがごちゃまぜに入っています。これは、一面から見れば、混乱しているとか未成熟だとか受け取ることもできるのですが、他方で、われわれがそれを資料として使う場合、『資本論』全体の論理構造の解明のカギを提供する、つまり、まとまったものを後からきちんと整序して書くというときには書かなかったかもしれないことが書いてあるわけでして、いろいろなところにヒントが隠されている可能性がある、というふうに思います。これは第二部門の第四巻までに入っている各種の草稿の一般的な特徴と言ってよいでしょう。

第二部と第三部の準備草稿が揃う

ここまでII/4についての話を終えまして、次に、新メガで初めて公表される『資本論』関係の新資料・草稿を含んでいるのは、第二部と第三部に関連するII/11、12、14です。いずれも2003年から後に出されたものです。これら三巻にII/4を合わせると第二部と第三部関連の草稿がすべて揃うことになります。またII/11とII/12の編集には日本人研究者が大きく関与しました。II/11には『資本論』第二部の初稿（これはすでにII/4.1に収録）を除いて第二稿から第八稿まで、つまりマルクスが最晩年までかかって書き続けたいくつかの第二部の草稿がクロノロジカルに配列されています。またII/12はエンゲルスがそれらの草稿を元にして第二部を出版するために書いた原稿が入っています。これに対してII/13は実際に出版された第二部が入っています。編集原稿なのだから出版されたものと同じではないかと思われるかもしれませんが、実は微妙な違いがいろいろなところに存在しています。メガは今残っている原資料を全部出すということが原則ですので、たとえ、大雑把に研究するのであればそんなところまでいちいちこだわらなくてもいいのではないかと思われそうなところまできちんと全部やるわけです。それで、II/12にはエンゲルスの編集原稿、II/13にはエンゲルスが実際に刊行した第二部というのが入っています。II/14とII/15はやはりこれも同じようにエンゲルスが第三部について編集した原稿、そしてこの原稿を元にして実際に出版された第三部です。ですから、十三巻と十五巻はわれわれがすでに翻訳ないし原文で見ているものです。初めてわれわれの目に触れるのは

十一、十二、十四です。とくに十一には初めて見ることができるようになったものがたくさん入っています。十二、十四ももちろんそうなのですが、この両巻は先ほど述べましたように編集原稿ですから、実際に出版されたものとのあいだに大きな違いはありません。

第二部草稿によるエンゲルス版の徹底的な検証

そしてこれらを元にして、エンゲルスがなした刊本つまり85年と94年に編集して出したものとの全面的な徹底的な対比が可能になりました。今では印刷されて活字になったものだけを見ればわれわれはそういう対比ができます。

新メガはどの巻もすべてText TeilとApparat Teilとの二つに分かれています。Textの方にはマルクス・エンゲルスが直接に書いたものが入っています。それに対する、つまりTextがどういう状態であったとかどういう風にして後世に伝わったかとか内容がどうかとか、それから、書き直しがどうなっているかとか、そういったことが書かれているのがもうひとつのApparatなのですが、往々にしてこの後者が膨大な量になっています。もちろん巻によってまちまちですけども、Text Teilに対してApparat Teilの方がうんと大きかったり両者が同じくらいだったり逆にApparat Teilがあまりなかったりするものもあります。ここに現物をお示ししているII/12のApparat Teilは比較的大きい方なのですが、この巻には東北大学の編集グループが中心になって作成した極めて重要な新しい装置が加えられました。これは日本の研究者が考え出した非常に画期的なものだと思います。話が長くなりますが、これについて少しだけ解説させていただきます。

この巻のApparatには三種類の「一覧(Verzeichnis)」が入っています。一つ目は「構成比較(Gliederungsverzeichnis)」、二つ目は「出自比較(Provinienzverzeichnis)」、それから「乖離一覧(Verzeichnis der Textabweichung)」です。これら三つのVerzeichnisの並べ方も一定の論理にのっとっています。まず最初の「構成比較」ですが、この「比較」というのは何を比較しているかと言いますと、エンゲルスが出版してわれわれがこれまで見ていた第二部とマルクスが最初に書いたものとの比較です。それをいろいろな方面から行っているわけです。まず第一番目はもっとも大きなレベルでの比較です。エンゲルスが書いた『資本論』第二部の構成ですがこれは三つに分かれていて、マルクスの草稿では第一章・第二章・第三章と三章構成だったものが三篇になってその下が章になって次に節に

分かれてという形になっていますが、どこで区切ってどういうタイトルをつけているかをマルクスの草稿と対比しています。これらがマルクスの草稿のままになっていないケースが多数あります。もし原稿が一つだけだったら面倒な問題はないのですが、しかし八つの原稿をつぎはぎして作成したわけですから大変複雑になります。これを逐一示そうというわけです。

まず Gliederungsverzeichnis について説明します。エンゲルスの編集によるテキストに使用されているあらゆるレベルの区分の見出し、つまり全体のタイトルそれから篇・章・節その他がマルクスのすべてのヴァリアントにおいてどのように記されていたか、どこに仕切りがあったか、その仕切りとエンゲルスの編集が合っているか合っていないか、タイトルの変更がどうなっているか、また仕切りが存在したかしなかったか、こういったことをはじめから終わりまで全部逐一示してあります。ただしタイトルですから全部合わせてもそれほど大きな分量にはなりません。だからこの Gliederungsverzeichnis は Apparat Teil に収録されている装置の中では一番短く、4-5 ページ程度に収まっています。これらがマルクスの草稿ではどうなっていたかということなのですが、「マルクスの草稿では」という時に、「草稿のここです」ということをどうやって示すかですが、これは II/11 のページ数・行数で示されます。つまりわれわれはマルクスの草稿ではどこかということを II/11 を参照することによってすぐに知ることができます。実は II/12 が出版されたのは 2005 年でした。それに対して II/11 は 2008 年に出版されました。つまり前者を作っている時には後者はまだ出ていなかったわけで、ゲラのようなその元になるものを参考にしながら作成されたと思われます。この Gliederungsverzeichnis から示されることは、第一に、第一章（または第一篇）、第二章（または第二篇）つまり第二部のはじめの二つの部分は、草稿が書き直されるごとに新たな区分けがなされている、また章（篇）の表題も変更が加えられていた、しかし、エンゲルスはそれらをいちいち全部そのまま再現することはしていない、ということです。もちろんこのような状況をそのまま再現しようとすると極度に複雑な処理が必要になり場合によっては収拾がつかなくなりますから、エンゲルスは自分の判断で一定の整理を加えなければならなかったと思われます。こうして、エンゲルスによる表題の定式化が、取り扱われている対象と大きく矛盾しているという場合も生じています。また、再生産表式論が展開されている第三章（篇）では、マルクスはそもそも最終

的な小区分を残していなかったということですから、われわれが読んでいる第二部の第三篇の中にあるいくつかの見出しというのはすべてエンゲルスが編集原稿において初めて付け加えたものである、ということが明らかになります。

次に、「出自一覧 (Provinienzverzeichnis)」です。これも非常に大変な作業だったと思うのですが、エンゲルスの編集によるわれわれが通常見ている第二部のテキストのはじめの一行目から最後の一行目まですべての部分について、それぞれのかたまり（単位）が、草稿のどこからとられているかということを全部指示してあります。草稿から取られたひとつのかたまりになっているところが区切りの単位をなしています。非常に多くの数になります。場合によってはひとかたまりが 2-3 行のところもありますし、2-3 ページ続く場合もあります。そして、エンゲルスの編集による原稿つまり II/12 に収められている本文の 1 ページ目の 1 行目から、ここからここまではどの草稿のどの箇所から取られているかということが、最後の 1 行目まですべて示されています。その草稿の箇所を示すのに先ほどと同じように II/11 のページ数と行数が使われています。したがってわれわれは II/11 と II/12 また場合によっては II/13 を並べて見ることによって、逐一、エンゲルスの作成した『資本論』第二部の個々の箇所がどの草稿のどの箇所に由来するのかをはじめから終わりまですべて知ることができます。

以上が「出自一覧 (Provinienzverzeichnis)」ですが、ここでは扱いの対象が先ほどの見出しよりもひとつ下のレベルに下がっています。この一覧から分かることは、もちろんこのことだけではないのですがとりあえず初歩的に分かることは、編集原稿の構成あるいは展開順序がマルクスのオリジナル原稿とどう違うか、前者は後者をどのように変更することによって成立したかということです。この点がすべて逐一明らかになります。さらにエンゲルスがどのような省略をしたのか、個々の章や節がマルクスの草稿からどのように寄せ集められて作られているか、これらのことも明らかになります。寄せ集めでエンゲルスが作っているところは沢山あるわけですが、しかも順番を変えているところもあります。その上全部使ったところと一部使い残しているところとがあります。これらのことがこの一覧から明らかになります。

『資本論』の第二部・第三部にエンゲルスは「編集者の序文」を付けています。ここで自分がどのような方針によって編集を行ったか、元になった原稿がどういう状態であった

かということを報告していますが、これが極めて不十分であり部分的であって全体の状況をはっきり伝えていないということが明らかになります。このようなことはインスティチュート版の時代には絶対に言ってはいけないことでした。エンゲルスの編集はマルクスの諸章句を選択して整序することにあったのですが、その際本文の置き換えそして諸章句の挿入つまりマルクスの草稿のなかに書かれていない言葉や文章を入れている場合があります。これは別にエンゲルスが悪意で行ったことではなく、読者にわかりやすいようにしようと思って取った措置だと思われます。こうした作業階梯は「出自一覧」に全部反映されています。この「一覧」から編集原稿と草稿との関係を明確に示すことができます。そしてこの「出自一覧」によって直接に分かることというのは、編集された原稿が元の草稿からどのように構成されたかということですが、逆に草稿の方から編集原稿を見ていくということもできます。現在刊行されている II/12 にはそのような一覧は付いていませんが、すでにある一覧から自分で作ることができます。つまり、草稿のなかにチェックを入れていくことによって、今度は草稿のどこの部分がエンゲルスの編集したテキストのどこに入っているかということを逆に知ることができると同時に、どこにも使われていない部分つまり空いているところが出てきます。そうするとエンゲルスがどこで何をどう使ったかというということと何を使わなかったかということが分かるわけで、このような逆方向の一覧を作ろうと思えば自分で作ることができます。これにはそれほど大きな手間や苦労はかからないと思われます。これによって、不採用箇所を草稿の全体にわたって調べることが可能になっていますが、これは可能であるということだけで、実際に刊行されている II/12 のなかではそこまではやられていません。しかしやろうと思えば短時間でできるはずです。

最後が「乖離一覧 (Verzeichnis der Textabweichung)」です。これは扱う対象が一番下のレベルになります。つまり、エンゲルスの編集原稿のそれぞれの部分が草稿のどこから取ってこられたかを、かたまり（単位）ごとに対応させたのがこれまで見てきた「出自一覧」であったとすれば、今度は、そのなかのひとつひとつの言葉が草稿と合っているのか違っているのかということを、ひとつひとつ全部書き出してあります。これは三つの「一覧」のなかで一番長いもので、II/12 の Apparat Teil が大きくなっている理由のひとつです。エンゲルスが個々のマルクスの章句に対してどのような変更を企てたか、文章

や概念に加えた変更また補完や削除がどうなっているかを、編集原稿のすべての当該箇所について逐一記述してあります。これは「出自一覧」を前提とした作業です。ですから、「構成一覧」と「出自一覧」それに「乖離一覧」というのは、一定の論理にしたがって構成されているわけです。「乖離一覧」は当然三つの「一覧」のなかで最も分量が膨大です。またひとつひとつの言葉について違いがあればそれを逐一記してあります。ここでもオリジナルの草稿の当該箇所はII/11のページ数と行数で示されていますから、どこがどう違っているかということをすぐに読者はチェックすることができます。したがっていずれの一覧を使用するにもII/11とII/12が同時に必要になります。逆い言えば、新メガのこの二つの巻があれば、すべての違いをあらゆるレベルで確認しようと思えば確認できるということです。

エンゲルスはマルクスの諸定式を変更したり重要な諸概念を別の術語で取り替えたりあるいは翻訳つまりドイツ語化を行っています。この最後の点は重要なことですが、マルクスの草稿中の抜粋は原則として原語でやられています。ただマルクスがその時の気まぐれでドイツ語に訳したりしているところもありますが、原則はすべて原語（多くは英語やフランス語）での表記です。エンゲルスは草稿の編集にあたって、（当然メガを編集するなどということは考えていなかったわけですから）元のものを忠実に再現するということよりも、一般の人たちにわかりやすい、要するに労働運動や社会主義運動を担っている人たちに読ませるということを第一義的に考えていたはずですから、すべてをドイツ語に訳しています。それはもちろん彼の政治的方針としては妥当であったと考えてよいと思いますが、しかしその時にもまたいろいろな問題が生じていました。そして、これは以上の「一覧」を作成された方々がざっと調べられたことなのですが、こういったテキストの変更は約5000カ所もあるということです。

以上に紹介した「三つの一覧」から、エンゲルスが編集者序文で述べている編集原則は全幅の信頼を置けないものであるということが明らかになります。彼のテキストへの介入は短縮、拡張、定式の変更、そして順序の入れ替えを含むものですが、これらはすべて読みやすく分かりやすい本を作る、筋が通ったものを作るという、もちろん良心的な配慮によってなされたわけですけれど、しかし、このようなことがこれまで想定されていたよりもずっと広範囲にわたっているということが明らかになりました。

以上のようなことは『資本論』第二部についてはできるようになったのですが、残念ながら第三部のエンゲルスの編集原稿が収められてる第十四巻にはこういったものはありません。こういったものがもし同じようなコンセプトで作成されれば、第三部についても同様な検証作業が必要になり可能になるでしょうけども、これは今後だれかがやるかやらないかというこれからのことです。

メガの一部オンライン化、強力な検索機能

さきほど、90年代の中頃からデジタル革命によって本の作り方が大きく変わってきたということを述べましたが、今スクリーンにお示ししているのはベルリンのブランデンブルク科学アカデミー(BBAW)のホームページ中のひとつのページ（http://telota.bbaw.de/mega/）ですが、これはメガ・デジタルと呼ばれています。これはBBAWの中のメガ編集担当者と日本の東北大学の研究者たちが作成したものです。すべて第二部門の巻だけなのですが、そのうちの八つの巻（1.1、1.2、4.1、5、11、12、13、15）について、新メガとして紙ベースで出版されたのとまったく同じ形でオンラインでテキストをそのまま読むことができます。このようにデジタル化してオンラインで公表するという場合、はじめからデジタル方式で編集が行われていればそれほど大きな手間はかからないと思いますが、しかし、そういうことができたと思われるのは、デジタル革命後の新体制下で作成された諸巻のみであって、前世紀80年代までに編集された諸巻についてはオンライン化するにあたって活字の本をデジタル化するという大変な手間を要したと思われます。

またこのオンライン版には検索機能も備わっています。人員と予算が確保できれば今後時間をかけてメガの全巻に広げていきたいということのようなのですが、今のところこの検索は以上にあげた第二部門の八つの巻についてだけ可能です。ひとつひとつの巻それぞれについて検索をするということと、もうひとつ重要なことは縦断検索ができるようになっていることです。検索ページ上でチェックを入れた巻について、それぞれの巻のどこに入力したキーワードが出てくるのかが一覧表示されます。非常に便利で現在のところこれ以外にこのような検索によってテキストを調べる方法はありません。ただ問題なのは、新メガは原語主義を採っていると同時にオリジナルテキストが執筆ないし刊行された時の綴りをそのまま再現していますので、検索もそれにしたがって行わざるを得ないというこ

とがあり、利用にあたって一定の制約が加わるという点です。ドイツ語はビスマルクによるドイツ統一の時期を境にして正字法 (Rechtschreibung) が大きく変わったと言われていますが、マルクスの経済学関係の文書の執筆や刊行はちょうどこの時期を前後しています。ただし、マルクスがいちいちこの変化に順応したわけではないでしょうが。それはともかく、旧正字法の時代に書かれたテキストは旧正字法によらなければ検索できない、ということになり、あまり大したことではありませんがこれに慣れるのに一定の時間と労力を要します。また、第二部門の全体にこの機能を拡充していこうということのようなのですが、その場合、検索は同じ言語でなければ、あるいは多言語間の場合にはたまたま綴りが同じでなければ、機能しないという問題が新たに生じます。この検索とそのための検索項目ごとのデータベースが作成されるにあたっても日本人研究者の協力が大きな役割を果たしたようです。おそらくこのコンセプト自体も日本人研究者の創案によるものではないかと思います。関心のある方は先に示した URL を開いで試してみてください。この検索機能は現在すでに出来上がっているというより、今後さらに検索対象が拡充されていくにつれて機能そのものも充実していくことが期待され、その意味で進化の途上にあるものと受け取れます。

新メガ第二部門の日本での受容と翻訳

次に、新メガの刊行開始とともに始まった日本でのその翻訳についての話題に移ります。また、少しだけですが、日本だけでなく他の諸国で新メガがこれまでどのように受け止められたかということにもかいつまんでふれたいと思います。まず日本での翻訳の開始ですが、原典主義にのっとって編集されたメガの翻訳は限定的なものとならざるをえません。原語主義ですからひとつの巻の中にいくつもの言語が混在していたり巻によって異なる言語が使用されていたりします。しかし通常の意味での翻訳というのはあるひとつの言語から他の言語へ文章を移すということですから、メガのようなものはそもそも翻訳を拒否しているとも考えられます。また膨大な付属資料 (Apparat) を翻訳にどう生かすかということも考えなければなりません。おそらく、Text と Apparat からなる原典の二冊構成をそのまま踏襲して日本語に翻訳してもあまり意味はないでしょう。

これまでに日本では第二部門の中からすでに９冊が翻訳されていますが、それぞれの原

典にもともと付属していたApparatの内容は取捨選択をして本文の中に注として埋め込むという方針がとられています。それでもかなり膨大なものになっています。翻訳といってもこのような限定的な意味においてであって、実際に翻訳されたのは第二部門の一、二、三の三つの巻のみです。一は二分冊、二は一分冊、三は六分冊で合わせて九冊が、『資本論草稿集』として大月書店から実際に刊行されました。これは驚くべきことで、世界中他に例がありません。翻訳先進国である日本ではこのうちのおよそ七冊分については参照することのできる既訳本がすでにありました。この九冊のうち『グルンドリッセ』の二冊、『経済学批判』が一冊、そして『剰余価値学説史』に当たる部分がおよそ四冊、これらを除いてまったくはじめから訳さなければならなかったものはおよそ二冊分ということになります。ただ、はじめからではなかった部分も、前からあった翻訳の訳文をそのまま転用したわけではもちろんありません。新訳はあらたな編集方針に基づいて新しい改善された訳文になっています。これはとりわけ『経済学批判要綱』を収録しているII/1.1とII/1.2の二分冊について言えます。この巻には旧訳があったのですが、1950年代の末からの数年間に世界に先駆けて日本語に翻訳されました。先ほど申しましたけれども原典が53年にベルリンで出版されて数年後には日本語訳が始まりました。しかし、はっきり言って非常に問題の多い訳でした。当時の研究レベルからして『グルンドリッセ』の中身があまり良く分かっていないままに翻訳が進められました。当時は内容的にも理解がなされていない点も少なくなかったのです。しかし、にもかかわらず、ともかく翻訳が存在したということはその後の『グルンドリッセ』の普及と研究の進展にとって非常に大きい意味をもったと思います。この翻訳があったことによって60年代末からのいわば『グルンドリッセ』ブームのなかでこの草稿の研究が大きく前進したということも確かなことです。ですから翻訳というのは完璧ないし少なくとも良質でなければ意味がないということはないわけです。使いようによってはかなり悪い翻訳でも無いよりはあったほうが良いと私は思っています。

九冊の原書と翻訳の刊行年をちなみに一覧表示すると次のようになります。

81, × 93,　83,　78, 80, 81, 82, 84, × 94

76,　81,　80,　76, 77, 78, 79, 80,　82

原書が76年から82年までに出ましたがこの年数が下に並んでいます。それに対応する

訳書の刊行年が上に示されています。あいだに隙間が空いているところは第二部門の第一巻、第二巻、第三巻の区切り目です。だいたい下から上へは2-3年のずれで対応していますが、それ以上にあいだが空いているのがまず『グルンドリッセ』の第一分冊で、76年から81年まで5年空いています。空くにはいろんな理由があったのですが、一番大きい理由はもちろん翻訳が難しいということです。旧訳を参考にすることはできたのですが、役に立たないしかえって邪魔になるようなところが非常に多かったと思われます。それから×印の入っている第二分冊の訳は驚異的に12年も空いていますが、これは訳が難しかったということと当初担当されていた佐藤金三郎先生がずっとさぼっておられてそのまま89年に亡くなられたという事情がありました。亡くなられるまでは大月書店はやってもらうということにしていたようですので、進捗がなくても他の人に代わってもらうということはできませんでした。それで80年代末までそのままになっていました。佐藤先生が亡くなられたあと大谷禎之介先生のところにお鉢が回ってきて、大谷先生が2-3年でやられました。そういう形で翻訳が出るまでの期間が飛びました。その他はだいたい原書と翻訳の刊行年は2-3年の間隔になっていますが、ただし最後の61-3年草稿の×印をつけた末尾の部分の翻訳が大きく遅れています。第三巻の第六分冊ですが、これには『剰余価値学説史』が終わったあとの部分が収録されています。全体の大きな内容は『資本論』第一部の後半部分について、資本蓄積論や労賃論とかがメインですが、ここには先ほど述べましたようにいろいろな話題がごちゃごちゃに入っているということもあります。それともうひとつは、これの原書が82年に出版されたあとでベルリンでも日本でも執筆時期・執筆順序をめぐって大きな論争が起こりました。翻訳の刊行が遅れた理由としてこのようなこともあったのではないかと思います。訳書に付された「栞」のなかで三宅義夫先生がこの問題に言及されています。論争の結果、原書の編集に誤りがあったということを旧東独の編集当事者が認めたということで、とりあえず決着しました。しかし新メガの一部として一旦刊行された以上は翻訳もそれに従って行われています。このように、九冊の翻訳は全体としては比較的スムーズに進みましたが、新メガが出版されるとおよそ2-3年後に外国語（日本語）に翻訳されるというこのようなことは、世界中他に例のないことです。II/3の最初の五分冊とII/2、これらの翻訳は比較的早期に出版されました。『経済学批判』はもちろんそれまで何種類も翻訳がありましたから、それほど大きな困難はなかっただろ

うと思われます。『要綱』の二分冊がともに時間がかかったのは既訳の問題の多さと翻訳の難しさそれから監訳者の個人的な事情があったことによります。それからII/3の最後の第六分冊も翻訳刊行に時間がかかりましたが、これは全くの新訳であったということと原書の刊行後に生じた編集上の問題をめぐる論争の影響があったからでした。

ところで、II.1の第一分冊が翻訳刊行されたのは1981年でしたが、このときには『グルンドリッセ』のブームはすでに去っていて、訳書がとりたてて大きなインパクトを少なくともその時点で短期的に与えることにはなりませんでした。ただし、この書物の翻訳は今ではすでに増刷が出ており、やはり新訳が出たのでこれを手元に置いておこうという読者は相応の数にのぼると思われます。しかし、この新訳が新しい目立った研究の展開のきっかけになったとかあるいは『グルンドリッセ』研究がふたたび盛んになるとかいうことはなかったように思います。これは翻訳ではありませんが、『経済学・哲学手稿』の新メガ版の刊行（I.2, 1982）についても言えます。この草稿は私の本日の報告の主題からのはみ出しになりますけども、80年代のはじめのころに出ました。もしこれが70年代の中頃までに出ていたら大変なことになっていただろうと思われます。しかしこの草稿の新メガ版が出たときにはすでにこの手稿をめぐる論争とか議論はほとんどなくなっていて、山中隆次先生がすこし紹介の文章をお書きになっておられましたがほとんど反響はありませんでした。『グルンドリッセ』はそこまでは行かなかったにしても、新訳が出たからどうということはありませんでした。そうすると、これら九冊のうち翻訳が出ることによってなんらかのインパクトを与えたと今振り返って思われるのは、II/3の最初の五分冊だったでしょう。これらは76年から80年までの4年間という比較的短い時間にさっと出ました。もっともこの中の多くを占めるのは『剰余価値学説史』ですでに内容的には知られていましたが、しかしこれらが新しい訳本として出たということで、特に一番はじめの部分、すなわちマルクスが59年の『経済学批判』の続きを書き始めてそこからだんだん話が逸れていく、そして『剰余価値学説史』に入っていくという経過が記録されている部分ははじめて繙読可能になりました。そして、61-3年草稿の研究がこの時期に非常に活発になりました。ただこれをどのように評価するかということについては判断が分かれます。

ただし、メガやその翻訳のもつ意義がこうした短期的な反響によってのみ評価されるべきものではないことはいうまでもありません。この事業はもっと長い歴史的な射程をにら

んだものであるはずです。

新メガの国際的な受容と反応

時間がなくなってきましたのですこし話を飛ばさせていただきます。『資本論』の研究は広く世界中でなされていますがもっとも研究者の数が多く地域的にも広いのは何と言っても英語圏です。この英語圏を含む非ドイツ語圏で『資本論』がこれまで比較的研究されてきたり論争がなされてきたりした地域で、ドイツ語を主体とするメガが刊行されたことによって何らかのインパクトが今まであったかということですが、残念ながらメガの諸巻はほとんど利用されていないのが実情のようです。あまり多数は出ていませんが関連著作や論文集のいくつかから窺えるのは、ほとんどメガが利用されていないということです。もちろん少数の例外はありますが。これにはやはりグローバリゼーションのなかで英語が非常に大きいウエイトを占めるようになってきているということがあるでしょう。ともかく英語であれば全世界中どこでも話がつうじコミュニケーションができる、英語で書けば世界中で読んでもらえると、こういうことは実態に近いのかもしれませんが。こういう状況のなかで逆に英語圏の人たちのあいだでは、英語で書かれていないと読まない、重要であれば英語になっているはずだという態度が、かなりの部分に強くあるように思います。そうすると、メガはせっかく出ていても利用されないということになりかねません。そういうなかで新メガの刊行を意識したと思われる最近の英語による論文集が二つ目にとまりました。どちらも英語圏の出版社から出ているのですが寄稿者の顔ぶれを見ると英語圏の人たちは半数以下です。そしてこのなかの引用文献や参考文献を見ると、新メガを使って主張を裏付けているということがうかがわれないものもあります。

ところで、中国は今でもいちおう形の上では社会主義で中国共産党が政権を掌握していますので、マルクス主義は、たぶんお題目に近いのでしょうけれども、いちおう公式の教えだということになっています。高等教育、中等教育においても必修科目としてひととおり教えられていますし、また、中国のメジャーな大学には必ず一学部と同等の格付けを与えられた「マルクス主義学院 (School of Marxism)」というのがあります。こういう体制があるわけですから当然マルクスのテキストを中国語に翻訳するということが重要になるわけで、これを一手に握っているのが CCTB（Central Committee Translation Bureau、

中央委員会翻訳局）です。このような中国で新メガがどのように受け止められているかということの一例を引いてみます。日本ではメガについての科研費による国際コンファレンスがいろいろな形で行われていますが、今年の２月に東京で開催されたコンファレンスに中国から来ていた研究者の報告で述べられたことを引用として紹介します。まず、マルクス主義学院がどこの大学にもあるわけですから、原資料を研究しているとかマルクスを研究しているということを建前にしている人たちはいっぱいいるはずであるにもかかわらず、中国でドイツ語がわかるマルクスの研究者は非常に少ない。だからもちろんメガを直接見れる人も非常に少ない。そして、CCTB は伝統的には旧ソ連で出されたマルクス・エンゲルス著作集 (MEW)（あるいはそのロシア語版）を元に、そこから独自の視点で選別を加えて中国語に翻訳するというのがベースになっていましたが、今でもこれはあまり変わっていないように思います。それへの追加として、新メガで刊行された諸巻のなかから選別をして使えるものは使う使えないものは使わないというように利用されています。それと同時に中国のなかでは今でも次のようなことがあるようです。これは今年に入ってから日本に来た人の論文のなかで紹介されていることですが、メガそのもののコンセプトに対する反発というもの、つまり、マルクスとエンゲルスの書いたものをそのまま全部公表するということはマルクス主義の統一性を破壊することになるのだ、という意見が一部に根強く存在しているようです。これは 30 年代中葉に旧ソ連で第一次メガが中止された一つの原因でもあったことですし、それから、戦後 1970 年代のはじめまでメガの再開が遅延した、代わって MEW という形でマルクス・エンゲルスの著作が公表されことになった、ひとつの理由ではないかと思います。中国におけるメガに対するこうした反発が具体的にどのように表現されているか、若干の引用をしてみます。「メガはテキストの歴史的形成過程を提示することによって、相対的に成熟したテキストに対して疑念を投げかける。マルクスとエンゲルスの著作の統一性を破壊する。」これはやはり 1930 年代に初期マルクスのテキストが刊行された時に生じたリアクションと非常に似通っていると思われます。「メガの研究はマルクスとエンゲルスのあいだの相違を誇張する。」これはいけないことであり両者は一体なのだ。「メガの研究はマルクスの学術思想とイデオロギー的マルクス主義を別物とするということを求めるものである。」このことも否定的に捉えられます。「マルクスの思想をマルクス主義の史的伝統から切り離すべきではない。」こういう形でメガ

に対してはこれを受け入れられないという、空気といいますか雰囲気というようなものが、中国の全部ではないのでしょうが一部には存在しているようです。

新メガの刊行と日本での「形成史研究」のありかた

新メガの第二部門が刊行されそれにともなう『資本論』の草稿研究というものが日本では70年代から行われるようになってきました。そして70年代中期から約10年にわたって非常にさかんになりました。その最初の口火を切ったのが60年代の末にアムステルダムの社会史国際研究所(IISG)に行って『資本論』第三部の最初のところの草稿を見てきてそれを雑誌『思想』に発表した佐藤金三郎先生ですが、それから約10年後に大谷禎之介先生がやはりアムステルダムの同じ研究所で草稿調査を行いました。その成果はその後ずっと長年にわたって連続的に雑誌論文として刊行され続け、これから四巻本として出版されるということが予告されています。それからあと日本人の研究者たちが大村　泉さんとか大野節夫さんとかが同研究所での草稿調査に従事されました。直接アムステルダムに行かないにしても、70年代から80年代のはじめのころにかけて草稿研究が盛んに行われました。ちょうどそのころに新メガに収録の草稿類が日本語に翻訳されたわけです。特に研究と論争の対象となったいくつかの領域というのがあるのですが、そういう細かい紹介をする時間がなくなってきましたので省略します。

『資本論』第三部の主要原稿が入っているII/4.2に先行して、大谷先生により83年から、第三部第五章つまり信用論（利子生み資本論）についての研究が20-30本の論文として発表されています。このような理論的研究の動きは一方では存在しましたが、しかし、草稿の研究に対する疑問も非常に強く出されました。それをもっともセンセーショナルな形で提起したのが、1985年に高須賀義博さんが書いた『マルクス経済学の解体と再生』という本でした。たしかに草稿研究は必要でありマルクスの原テキストをきちんと研究するということは大事なことなんだけども、今の日本ではそういった研究が肥大化しすぎており重要な人材がそこに過剰に投入されている、と彼は主張しました。私もたしかにそうだと思います。それからもうひとつは、草稿研究とか文献研究というのはそれ自体が目的ではなく、最後はやはり理論的な研究そして実証研究と結びつかなければならないのですが、そこまでには非常に遠い距離があってまだ全然埋められておらず、草稿研究は草稿研究だ

けに専念していたというのが実情です。もちろん、今申しましたが、非常に大きな作業と専門的な知識といろいろなことを要求しますから、それだけに専念する人が何人かはやはりいなければならないこと、これは間違いありません。しかしみんながそんなことをやっていると経済学がだめになってしまいます。そこが大変難しいところです。文献学的研究というのはそこからあとに進まなければいけないのですが、そこになかなか行っていない、そこのところだけで足踏みして終わっていたというのが、残念ながら実際のところだと思います。ただし、その段階でも解決できていない問題、やらなければならないことがいっぱい残っているのも、他方では事実です。そういうことをやっている人たちの書いている論文や議論というのは非常に超専門的であって、やっている少人数の当事者たちが何か喋っていても周りから聞いている人たちには何を言っているのかさっぱりわからない、そういう超専門生と閉鎖性がありました。このようなことが非常に強く感じられたのは80年代前半から中頃の状況でした。最近は、ソ連・東欧の崩壊のあとマルクス経済学全般が低調になってきていて、こういうことさえあまりはっきり意識されることがなくなっている状況ではないかと思います。

メガをどう活かすか

それから、これまでのお話から明らかと思いますが、メガはきわめて専門性の高いもので、新メガが出たからといってこれがそのまま一般の読者に読まれることにはなりません。そうすると、新メガによって新しくいろいろなことがわかってきて、そしてこれまで信頼できると思われていたテキストの信頼性が揺らいでいるところがありますが、そういった成果を取り入れながらなおかつ多くの人に読んでもらえるようなわかりやすいテキスト、信頼のおけるしかも読みやすいテキストをどのように作っていくかということを考える必要があるでしょう。エンゲルスの版がこのままではだめだということはすでにはっきりしてきています。だからといって、誰もが新メガに入っている第二部と第三部の草稿を読みましょうということにはなりません。また第一部についてもどれが決定版かということが問題になってきているわけで、これまでに出ているもののどれかに準拠してそれでいいというようにはならないということもはっきりしてきています。新たな独自の構想に基づく新しい版を、メガとも違うしこれまで受け入れられてきた版とも違うものを作って

いくことが必要になるのではないかと思います。たとえば、極端な例が『ドイツ・イデオロギー』ですが、『資本論』と違ってこれには完成されたものは何もありません。この中には1840年代中頃のマルクスとエンゲルスの思想の重要なものが入っているのですが、しかし、残されているのは彼らが何度も書き直しをしたもの、すごくわかりにくいものだけです。メガとしては残された草稿群をそのままの形でおおやけにする（I/5として刊行準備中）ということは大事なのですが、それだけではマルクスおよびエンゲルスの当時の思想を多くの人の検討や理解に付すことはできないでしょう。同様のことを『資本論』をはじめとしたマルクスそしてエンゲルスの諸著作について考えることが求められるのではないでしょうか。

新メガ第二部門の構成（新旧編集体制において変化なし）

II /1 : Ökonomische Manuskripte 1857/58. (Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie) 2.Teil 1: 1976, Teil 2: 1981.
II/2 : Ökonomische Manuskripte und Schriften, 1858–1861. (Zur Kritik der politischen Ökonomie u. a.) 1980.
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 1-6. 1976,77,78,79,80,82.
II/4.1 : Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 1. 1988.
II/4.2 : Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 2. 1993.
II/4.3 : Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 3. 2012.
II/5 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1867. 1983.
II/6 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1872. 1987.
II/7 : Le Capital, Paris 1872–1875. 1989.
II/8 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1883. 1989.
II/9 : Capital, London 1887. 1990.
II/10 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1890. 1991.
II/11 : Manuskripte zum zweiten Buch des „Kapitals“ 1868 bis 1881. 2008.
II/12 : Das Kapital. Zweites Buch. Redaktionsmanuskript von Friedrich Engels 1884/1885. 2005.
II/13 : Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Zweiter Band. Herausgegeben von Friedrich　Engels. Hamburg 1885. 2008.
II/14 : Manuskripte und redaktionelle Texte zum dritten Buch des „Kapitals“, 1871 bis 1895. 2003.
II/15 : Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Dritter Band. Herausgegeben von Friedrich Engels. Hamburg 1894. 2004.

新メガ第二部門の各巻・分冊の刊行順序

II /1 : Ökonomische Manuskripte 1857/58. (Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie) Teil 1: 1976 (1939-41, 1953)
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 1: 1976
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 2: 1977
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 3: 1978
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 4: 1979
II/2 : Ökonomische Manuskripte und Schriften, 1858–1861. (Zur Kritik der politischen Ökonomie u. a.) 1980 (1929)
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 5: 1980
II /1 : Ökonomische Manuskripte 1857/58. (Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie) Teil 2: 1981 (1939-41, 1953)
II/3 : Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). Teil 6: 1982
II/5 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1867. 1983.
II/6 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1872. 1987. (2.Aufl.)
II/4.1 : Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 1. 1988.
II/7 : Le Capital, Paris 1872–1875. 1989. (französische Übers.)
II/8 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1883. 1989. (3. Aufl.)
II/9 : Capital, London 1887. 1990. (englische Übers.)
II/10 : Das Kapital. Erster Band, Hamburg 1890. 1991. (4. letzte Aufl.)
II/4.2 : Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 2. 1992[3].
II/14 : Manuskripte und redaktionelle Texte zum dritten Buch des „Kapitals“, 1871 bis 1895. 2003.
II/15 : Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Dritter Band. Herausgegeben von Friedrich Engels. Hamburg 1894. 2004.
II/12 : Das Kapital. Zweites Buch. Redaktionsmanuskript von Friedrich Engels 1884/1885. 2005.
II/11 M: Manuskripte zum zweiten Buch des „Kapitals“ 1868 bis 1881. 2008.
II/13 M: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Zweiter Band. Herausgegeben von Friedrich Engels. Hamburg 1885. 2008.
II/4.3 M: Ökonomische Manuskripte 1863–1867. Teil 3. 2012.